



## 四旬節第2主日 (マタイ 17:1-9)

イエスが連れてきた場所にいつもとどまる

四旬節第2主日は主の変容を朗読に取り上げて、わたしたちを「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(17・5)と招きます。イエスの声に聞き従うとはどういう生き方を指すのか、考えてみましょう。

3月12日、51歳の誕生日を迎えました。日本人男性の平均寿命は、2015年の統計によると80.79歳だそうです。普通に考えるとあと30年生きられれば良しとしなければなりません。そうすると、これからの30年で何をすべきかを決めておかなければならないと思いました。

何か具体的なことを決めるのではありません。個人的には今年韓国語を勉強しようと考えていますが、あれをする、これをするということよりも、むしろ何をしているときでも「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」この声に聞き従っている人生でありたい。要するにイエスのあとをついて行く人生でありたいと思いました。

生まれた時の様子を母親から教えてもらったことがあります。わたしは仮死状態で生まれたために、すぐは鳴き声を上げなかったそうです。自宅から100mも離れていないところに産婆さんがいて、この方に取り上げてもらいました。第一声を上げるまで、母は生きた心地がしなかったそうです。産婆さんが処置をして、ようやく鳴き声を上げました。

それからもう51年も経ちました。あと5日経つと、今度は叙階記念日です。3月17日の叙階記念日で、とうとう25周年、銀祝を迎えることとなります。小学生で警察に補導までされた過去を含め、わたしは本当は「家を建てる者の捨てた石」(マタイ 21・42)だったのに、神さまは今日まで辛抱強く使ってくださいました。感謝に絶えません。先に話した通り、どのように決断し、行動すべきか、残る30年はイエス・キリストに耳を傾けて、決断し行動する人生を送りたいと思うのです。

福音朗読に移りましょう。ペトロは高い山でイエスの輝く姿、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合う姿を見て、「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです」(17・4)と感嘆しました。

この場面、わたしたちは大切なことを見落として、興奮気味に語るペトロの言葉を聞いているかもしれません。それは、「イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた」(17・1)ということです。誰がこの場所に導いてくれたのか。それはイエスだったのです。イエスが目的をもって弟子たちを山に連れて行き、あの光景をお見せになったということです。

そこを見落とさずに考えると、今度は「一同が山を下りるとき、イエスは、『人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない』と弟子たちに命じられた。」(17・9)ここもイエスが導いて山を下りているのだと分かります。目的があるのです。

何が言いたいか。弟子たちはイエスが導いたので高い山に連れてこ

られ、あの荘厳な場面を見た。そうであれば、これから山を下りて弟子たちが直面しなければならない主のご受難とご死去、これらもイエスが導いて体験させる出来事である、ということです。人間が体験する輝かしい場面も闇の場面も、イエスがそこに導いて、イエスが体験させてくれている。そういうことなのです。

ペトロをはじめ弟子たちは、高い山での栄光ある場面に感嘆するのですが、苦しめられ、死んで、復活することになっていると打ち明けられると、手の裏を返したように否定します。弟子たちはイエスに導かれ、連れてこられてすべての体験をしているのに、輝かしい場面は受け入れ、惨めな場面になると避ける。どちらもイエスは「わたしが弟子たちを呼び出して、指し示している道だ」と教えているのです。

同じことはわたしたちにも当てはまります。わたしたちは神に呼び出され、導かれてある時ある場所に置かれている。すべて神の導きの中で起こる出来事です。それなのに、自分にとって喜ばしいものは受け入れるけれども、辛く苦しく感じるとそれを途端に拒むのです。これはいけません。イエスが高い山に連れて行ってくだされば栄光を見るし、深い淵に下りて行くことになれば、試練を受けるのは当然です。

人はみな、神に呼ばれてこの世に生を受けています。神に呼ばれて、今日を迎えました。山の上でも、地の底でも、神が導いてお与えになるものは受けるべきです。もちろん、甘んじて受けるためには勇気が必要です。信頼が必要です。拠り所をどこに求めればよいのでしょうか。

わたしたちが拠り所とするのは次のみ言葉だと思います。「イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。『起きなさい。恐れることはない。』」（17・7）イエスのほうからわたしたちに近づいて、触れてくださる。実はイエスが弟子たちに近づく場面は、復活の場面にもあります。

「イエスは、近寄って来て言われた。『わたしは天と地の一切の権能を授かっている。』」（マタイ 28・18）いざ宣教に出かけてみると、だれも耳を貸さないとか冷たくあしらわれるとか、カトリック信者と表明しただけで「なんだ宗教の押し売りか」と相手にしてもらえない。いろんな惨めな思いが考えられます。けれどもイエスはいつも、どんなときも、わたしに近づいて力づけてくださるのです。

輝かしい場面も、惨めで避けて通りたい場面も、勇気を持って受け取る。そのためにイエスは近づいてくださるのです。イエスが導いてくださった場所で出来事は起こっているから、どんなことがあってもイエスはすぐに近づいて、触れてくださったり声をかけてくださるのです。

「イエスがわたしをここに導いて立たせてくださった。」そう信じて日々を送りましょう。わたしたちの態度がぶれないなら、人々は神の声に耳を傾けて生きるわたしたちの姿に魅了されることでしょう。